

右は赤色にて、他國の石とは異也、圖せる所の草木なき山は、ふすぼりしやふに見ゆる事也、山形も嶮にして、信州淺間山と違へり、麓に山伏等此家頭は座主と稱して、熊本侯より百六拾石御寄附地有り、坊中といふ僅の町有、宿屋も見え侍りし也、此山の開祖は元三大師にて、色々の寶物も有よし、常に參詣も有る所なり、燃る洞を上宮と稱して、山の靈を祭りて願望せりといふ、少し解せず、

〔三代實錄_{清和二十六}〕貞觀十六年七月二十九日乙卯、太宰府言、去三月四日夜、雷霆發響、通宵震動、遲明天氣蒙、晝暗如夜、于時雨沙、色如聚墨、終日不止、積地之厚、或處五寸、或處可一寸餘、比及昏暮、沙變成雨禾稼、得之者皆致枯損、河水和沙、更爲蘆濁、魚鼈死者無數、人民有得食死魚者、或死或病、

〔阿蘇家傳〕文永天皇七年十一月十五日、靈池大ニ震動、ス一時ノ中ニ二十四度、八年、震動同上、九年二月、後嵯峨上皇崩、蒙古襲來、

〔阿蘇家譜_{池變}〕建武二年五月五日鳴動、同六日辰刻鳴動、火石砂礫ヲ雨シ、烟中ニ物アリ、車輪ノ如シ、中ハ黒ク、中北ノ池ヨリ出テ空ニ入、按に中北の池とは、中北と北池との事を云へる。夫レにても少しひ聞えかねたり、猶考ふべし。堂舍悉破ル、

〔阿蘇學頭坊文書〕建武二乙亥年二月二十三日、寶池火石砂上黑烟覆天、

〔和漢三才圖會_{日向}〕霧島山 東西有二峯、而其間六里許最高山、其巔常燃起、八町上有禪寺、夏月映山紅、山石榴之花盛而美景、絕言語呼此樹名霧島、多移栽于諸國、蓋當山日向地、隸薩摩領、故以爲薩摩霧島、自西霧島至大隅正八幡四里、

〔遊囊賸記十三〕薩州舊傳記、享保元年申九月二十六日ノ夜半ニ、霧島西嶽震動シテ、神火燒出シ、三里廻程所々焼立、御材木名木ノ山、金胎兩部ノ池、東光坊權現ノ社、高原神德院、佐野權現ノ社マデ悉炎上、ソレヨリ打續、酉正月マデ、石沙入ノ外城十二ヶ所、燒家六百四軒、怪我三十一年、死牛馬四